

## •日本のニュー・ウェイブ——戸川純を中心に

本論文の目的は、「ニュー・ウェイブの歌姫」と呼ばれる戸川純の音楽が持つ独自性を、その背景にあったニュー・ウェイブを知ることによって明らかにすることにある。戸川純の音楽は、ニュー・ウェイブが流行していた時も、衰退して行く時も、消えてしまった現在でも、常にニュー・ウェイブであり続けている。なぜならそれが、戸川純の持つ特徴や作品を生み出す方法論の根幹を為すからであると推測する。

第一章は、そのニュー・ウェイブと呼ばれるムーブメントがどのようなものであったのかを知ることが目的である。第一節では、1950年代に生まれたロックンロールがロックと呼ばれるようになり、様々な変遷を経て、不良の音楽とされていた時代からプログレッシヴ・ロックと呼ばれる高尚な音楽へと至るまでの流れを俯瞰し、その後、1974年頃に一種の原点回帰として起こったパンク・ロックを論の中心に置いている。パンク・ロックは単純な構造の音楽と、攻撃的なスタイルが特徴的で、もともと否定的で反抗的な音楽であるロックに対して、さらに否定的・反抗的な態度を貫き、しばらくはロックに対して揺さぶりをかけたものの、すぐにロックの中の一つのジャンルとして飲み込まれてしまった。しかし、音楽的な発展を第一の目的としないからこそ、音楽以外の分野からの人間にも門戸を開け放ったことにより、新しい空気を取り入れることができ、またそれがニュー・ウェイブにもつながっていったのであろう。

第二節では、そのようなパンク・ロックの自由な精神性に、その頃急速に発展したシンセサイザーなどの新しい楽器や機材を取り入れて誕生したのがニュー・ウェイブである、との視点から進めていった。ここで取り上げるのは、代表的な日本のニュー・ウェイブのグループである<YMO>と、当時「テクノ御三家」と呼ばれていた<プラスチックス><ヒカシュー><P-モデル>であり、それらのグループの経緯を辿ることで、日本においてニュー・ウェイブがどのように育って行ったのかを知ることができる。ロックの世界では常に欧米の後を追う形になってしまう日本では、直接的にパンク・ロックを体験したのではなく、できあがったものとして受け入れたので、レコードの自主制作をレーベル化したインディペンデント・レーベルの流通網もなく、パンク・バンドやニュー・ウェイブのグループはライブ・ハウスで人気を掴んだ後、大手のレコード会社からデビューすることとなり、そのことが日本で一気にニュー・ウェイブが、特に<YMO>の音楽のようなテクノ・ポップが流行した理由の一つであろう。またこの節では、ニュー・ウェイブとは切り離せない電子楽器についての説明を加えた。

第三節では、ニュー・ウェイブの中での戸川純の歌手としての活動を、それぞれ属した

グループ別に、年代順に見ていく。それらを視覚的に判り易いものとするため、論文の最後に付録としてディスコグラフィを付けた。<ゲルニカ>、ソロ、<ヤプーズ>というグループの違い、また全てを通して、戸川純がどのような変遷を辿っていったのかをニュー・ウェイヴと流行とのかかわりから観察する。女優としての活動の方は、あまり情報が手に入らなかったこともあり、これまでに出演したテレビドラマ、映画、舞台の作品名を挙げるに留まった。

第二章は、作品を通して具体的に現象を追う中で、戸川純の持つ特徴を浮かび上がらせることを目的としている。第一節では、カバー曲だけに着目し、他のミュージシャンよりはるかに多い戸川純のレパートリーにおけるカバー曲の重要性を明確にする。カバーする曲は幅広い観点から選んでおり、古い歌謡曲や沖縄民謡のカバーに見られる、その曲を選ぶこと自体が目的のものと、一般的なポピュラー・ソングやクラシックの作品に、原曲とはかけ離れた衝撃の強い歌詞を新たに付けることによって戸川純の独創性を際立たせるという二つの意義がある。次の節では、そのカバー曲も含めて、ソロと<ヤプーズ>の全作品を概観した上で、戸川純を特徴付けている要素を挙げていく。それは、歌詞のテーマの奇異さであったり、歌い方に見られる少女性であったりする。

第三章はこれまでの章のまとめであり、第一節は第二章で作品から具体的に見てきたことから、戸川純の独自性をまとめることを試み、一方ではそれまでに触れられなかった他の作品についてもできるだけ紹介した。歌詞では、月経を描いた奇抜なテーマを持つ作品や、愛する相手を殺してしまったり食べたいと願う濃度の高い恋愛を描いた作品、静かな諦念感を持つ作品が印象深く、また歌唱法としては、少女のような声から叫びまで様々に使い分ける声と、ヴィブラートの使用、不使用や裏声などの技巧的なこと、さらにそれらの声の変化を一曲中においても多数確認できる作品があることなどが特徴的である。サウンドは、音楽性で言えばカバー曲と同様に幅広く、また、細野晴臣や<ハルメンズ>などニュー・ウェイヴの音楽家とのつながりもよく見られ、ソロの作品ではテクノ・ポップが多く、<ヤプーズ>の初期作品ではテクノ歌謡に分類できるものが多い。

第二節では、他の歌手との比較も試みた。戸川純と同じような個性を持つ歌手はいないが、それは多様性と変化していく、という戸川純のあり方にある。ニュー・ウェイヴが持っていた、常に変わって行くこと、新しいこと、それらを音楽的に楽しいものにする、という性格を戸川純は体現している。それは、戸川純を成り立たせる上で必要不可欠な要素でもある、ということが確認できた。